

欧文資料から見る 20 世紀前期上海語の音声・音韻的特徴

張 珮

要旨

本稿は、ダイナミックな音韻変化を遂げた約 100 年前の上海語について、20 世紀前期に、プロテスタント・ミッションの宣教師の手になった 2 冊の上海語教科書を基礎資料とし、当時の上海語が如何なる音韻変化を経ているのか、また他の時期の上海語と比べてどのような音韻的特徴を呈しているのかについて論じたものである。本稿では、20 世紀前期上海語の音韻変化と音韻的特徴について、(1) 軟口蓋破裂音声母の口蓋化、(2) 有声歯茎摩擦音[ɖ]と有声歯茎摩擦音[z]の混同、(3) 鼻化韻と非鼻化韻の混同、(4) 閉鎖音韻尾-k > -ʔの変化、(5) 入声韻母[eʔ]と[aʔ]の混同、という 5 つの点を取り上げ、先行研究で様に語彙拡散で説明されていた現象に対し複眼的な考察を試みた。結果、20 世紀前期の上海語は、19 世紀中期に兆しを見せていた一部の音韻変化が終盤を迎え、より複雑で多元的な言語変化の様相を呈していたことが明らかとなった。

キーワード：上海語，音韻的特徴，音韻変化，欧文資料，ラテン文字表記，上海語教科書

1. 緒言

19 世紀中期から 20 世紀中期にかけての約 100 年間、上海語は他の漢語系諸方言では類を見ないダイナミックな変化を遂げてきた。姜 (2011) は 19 世紀中期から 20 世紀中期の近代上海語を「第 1 期、上海開港から 1900 年以前」「第 2 期、1900 年から 1940 年以前」「第 3 期、1940 年以降」の 3 つの時期に区分している。钱 (2015a-e) は 1843 年上海開港から第二次世界大戦以前の上海語を「開港初期」「19 世紀晩期」「清代末期」「民国前期」「1930 年代」の五期に分けている。本稿は、上海語の 100 年間のダイナミックな変化の只中にある 20 世紀前期の上海語の音韻的特徴について、欧米人が著した文献を用いて考察するものである。

本稿は、当時アメリカから中国上海に渡ったプロテスタント・ミッションの宣教師が著した上海語の教科書 *Lessons in the Shanghai Dialect* (F. L. Hawks Pott, 1917, revised edition) と、*Lessons in the Shanghai Dialect, in Romanized and Character with Key to Pronunciation* 滬

語彙編 (R. A. Parker, 1923) を基礎資料とする。この 2 つの文献は、上海語の漢字音をラテン文字で表し、さらに英語でその意味を付しているため、当時の上海語の音・形・義を読み取る上で非常に使いやすい教材となっている。特に Pott の教科書は、1907 年に初版が刊行されて以来、1909 年版、1913 年版、1917 年版、1920 年版、1924 年版、1934 年版、1939 年版など度重なる改訂や増刷を経て、広い範囲で利用されていた。両資料は 20 世紀前期の上海語の音韻的特徴を考察するにあたって高い価値を有していることは明白である。

しかしながら、近代上海語の音韻変化について論じる上で、この 2 つの資料を用いた研究は管見の限り、钱 (2014) と钱 (2015d) のみである。钱 (2014) は 1847 年から 1950 年までの宣教師資料を総合的に考察した大著であるが、音韻に関して論じた内容は本書の僅か四分の一のみであり、近代上海語における重要な音韻変化を一様に語彙拡散理論 (lexical diffusion) で解釈し、それぞれの音変化の具体的・詳細な進行過程や、変化惹起の要因については十分な説明はなされていない。また、各文献に記された上海語音に関しては、二三の代表的なものを除いて具体的な記載が少なく、1953-1992 年における 15 の音韻体系対照表で挙げられた 40 文字の声母と 76 文字の韻母から断片的な情報しか観取するほかない。钱 (2015d) は、「民国前期の上海語」と題しているが、実態は Parker (1923) の原文を書き写したものである。

2. Pott (1917) の音韻体系

本書の著者である Rev. F. L. Hawks Pott (ト舩濟, 1864-1947) は、米国ニューヨーク市の牧師家庭に生まれた。彼はコロンビア大学を卒業し、米国聖公会の神学校で学んだ後、1886 年に上海へ渡った。1887 年より彼は米国聖公会が上海で創立した聖約翰書院 (St. John's College) で英語教師として教鞭を執り、1888 年には 24 歳という異例の若さで学長に任命され、77 歳までその任を務め上げた¹。

中国の社会、文化、言語をこよなく愛した Pott は、外国人がより早く現地の言語生活に溶け込めるよう、上海語の口語を習得するための教科書を手がけた。本書は上海語を学習する上で最も基礎的な教科書であり、学習者は本書を修めた後に、上海語で書かれた聖書や他の上海語教科書で更なる学習を深めるべきことが序文で述べられている。

Pott が上海語をラテン文字に転写する際は、Silsby の上海ラテン文字表記体系 (Shanghai System of Romanization)²に基づいていることが序文で言及されている。“By the use of the clear and simple System of Romanization, adopted by missionaries in Shanghai, it is possible to represent approximately all the sounds employed in the dialect. (...) The writer's thanks are due especially to Rev. J. A. Silsby for the permission to make use of his clear statement of the Shanghai System of Romanization.” (Pott 1907: i-ii) 本書は 1907 年から長期にわたって出版され続けたが、その後刊行されたいずれの版においても、凡例は初版と同じものが使用

され、表音体系に対する加筆や修正は行われなかった。本稿で扱う Pott (1917) は初版から二回目の改訂となる 1913 年版の増刷版であるが³、本書で記された上海語音は初版が刊行された 1907 年もしくはそれ以前のものとするのが妥当であろう。

Pott (1917) に記された上海語音から帰納された声母と韻母は表 1、表 2 のとおりである。「/」の前は Pott の表音、後ろは筆者による推定音価である。漢字については Pott (1917) の表記を採用した。

表 1 Pott (1917) の声母

p/*p	ph/*p ^h	b/*b	'm/*ʔm 每蠻	f/*f	'v/*ʔv 勿	
不杯	潑怕	賠便	m/*m 末明	拂粉	v/*v 物凡	
t/*t	th/*t ^h	d/*d	('n/*ʔn 乃儒)			'l/*ʔl 拎擲
堆帶	推天	疊臺	n/*n 納怒			l/*l 拉櫓
ts/*ts	tsh/*ts ^h	dz/*dz		s/*s	z/*z	
早執	出妻	姪茶		失衰	十裁	
ky/*tɕ	ch/*tɕ ^h	j/*dʒ	('ny/*ʔŋ 拈)	hy/*ɕ		y/*j
吉鳩	怯邱	及求	ny/*ŋ 業年	歇興		葉姚
k/*k	kh/*k ^h	g/*g	'ng/*ʔŋ 顏	h/*h	'/*ɦ	_//*ʔ
鴿加	磕揩	猗茄	ng/*ŋ 呆我	黑亨	合恆	愛糊
kw/*kw	khw/*k ^h w	gw/*gw		hw/*hw		('w/*ʔw 威彎)
骨規	闊奎	揆葵		忽昏		w/*w 活還

説明：

(1) Pott は声母を“Upper Series” (p, 'm, 'v, t, ts, s, 'l, 'n, 'ny, 'ng, k, ky, kw, i, 'w)、“Aspirates” (ph, f, th, tsh, ch, khw, h, hy, hw)、“Lower Series” (b, m, v, d, dz, z, l, n, ny, ng, g, j, gw, y, w) に分けている。“Aspirates”は字面のとおり有気音のことを指す。“Upper Series”と“Lower Series”は音域の高低を表し、中国の伝統的な音韻学から言えば声調の陰調と陽調に当たる。陰陽調は声母の清（無声）濁（有声）と関連しており、陰調は無声音に対応し、陽調は有声音に相当する。著者が本来声調に関する問題をここで提示するものもその点を意識しているからであろう。“It should be noted well that the difference between the corresponding initials of the upper and lower series is not so much a difference in consonantal quality as a difference in pitch, but there is a real consonantal difference. The higher series may be classified as *surd* and the lower as *sonant*.” (Pott 1917: iv)

(2) 中国語で有声・無声の対立を示さない声母 m, v, l, n, ny, ng, w, r に対し、Pott は字母の前にアポストロフィを付して陰陽調を区別している。“The apostrophe before a letter indicates that the letter belongs to the ‘higher series’.” (Pott 1917: iv) なお、本文では「蠻 ('man)」 「每 ('me, me)」 「勿 ('veh, veh)」 「顏 ('ngan, ngan)」 の 4 例のみ現れ、「蠻」を除く他の 3 例はいずれも陰調と陽調が共存している。(1) で述べたように、“Upper Series”を意味するアポストロフィ付きの字母を単なる声調の違いとみなす場合、音韻体系で新たに声

母を立てる必要はない。しかし、「音域の高低だけでなく、子音の質的な異なりも否めない」という記述から、m, v, l, n, ny, ng, w, r が陰調で発音される際に、有声性を阻害する子音要素が付加されることが考えられる。本稿では、補助記号アポストロフィを声門閉鎖音[ʔ]として立てる。

(3) Pott は y/*j と音域の高低で対を成す i を声母として挙げているが、本稿では i を韻母の一部とみなし、その場合の声母は零声母として扱う。例:「一(ih/*iʔ)」[音(iung/*iəŋ)]。

表 2 Pott (1917) の韻母

a/*a 挨篩	ang/*aŋ 櫻生	an/*ā 俺三	ak/*ak 尺客	ah/*aʔ 押殺
e/*e 哀哀		en/*ē 南官		eh/*eʔ 失末
i/*i 衣西	ing/*iŋ 心停	ien/*ī 煙先		ih/*iʔ 一雪
au/*ɔ 凹燒	aung/*ɔŋ 盞霜			auh/*ɔʔ 惡朔
o/*o 喔沙			ok/*ok 屋束	
oe/*ø 隨雖		oen/*ō 安酸		oeh/*øʔ 曷率
eu/*ɻ 謳收	ung/*əŋ 恩深			uh/*əʔ 厄色
oo/*u 烏梭	oong/*uŋ 翁松			
ui/*y 餘須		uin/*ỹ 雲熏		iuh/*yʔ 益
_/*ɿ 之思				
u/*ɥ 如書				
ia/*ia 雅斜	iang/*iaŋ 央庖		iak/*iak 約削	
iau/*io 夭小				
		ioen/*iö 冤		
ieu/*ir 憂修				
iu/*iy 椅				

説明：

(1) Pott は“Dok- Yoong Z- Moo (Initials used along)”と称し、単独で音節を成す成節的子音 m/*ɱ (例：嘸姆)、ng/*ŋ (例：魚吳)、ʔ/*ʔɿ (例：耳)、r/*ɿ (例：而兒) を挙げている⁴。字母 r について、著者は“a sound between final r and ʔ” (Pott 1917: v) と記述しており、本稿では*ɿ と推定する。

(2) 舌尖子音 ts, tsh, dz, s, z も“Dok- Yoong Z- Moo”として挙げられているが、“The first five [筆者注：ts, tsh, dz, s, z のこと] are followed by the vowel sound in the second syllable of able—prolonged. (...) It is not written, but understood in the Shanghai system.” (Pott 1917: v) とあるように、後ろに音を引き延ばす母音要素が付随される。Pott (1917) はこの母音要素を表記していないが、本稿では、漢語系諸方言で広く確認された舌尖母音*ɿ を立てる。

(3) 字母 u は“as oo in foot (always preceded by an s sound)” (Pott 1917: v) と記述されており、直前の声母は舌尖子音 ts, tsh, dz, s, z に限るため、円唇舌尖母音*ɥ を立てる。

3. Parker (1923) の音韻体系

本書の著者である R. A. Parker の活動や功績に関する記述は少なく、彼が上海市政府の公認通訳官兼中国研究総監であったこと以外、あまり知られていない。Hongkong daily Press office (1910) の“List of protestant missionaries in China, Japan and Corea”には、Parker がアメリカ南メソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church South, U.S.A.) に所属し、上海を経由し江蘇省の常州を主な活動拠点としていた記録が一行残されている。

Parker (1923) は上海市政府の公認教科書としてそこで勤める公務員たちが現地語を習う際に使用されていた。本書は初心者向けに作成されたものではなく、先に他の初級教科書を修めることが勧められている。“The book is not intended for beginners and a use of it presupposes a previous study of Pott’s Lessons, or some other book for beginners.” (Parker1923: Preface) 興味深いことに、Parker は初級教科書の例として Pott の教科書を挙げており、その影響力の一端がここからも窺えるのである。

Parker (1923) に記された上海語音から帰納された声母と韻母は表 3、表 4 のとおりである。「/」の前は Parker の表音、後ろは筆者による推定音価である。漢字については Parker (1923) の表記を採用した。

表 3 Parker (1923) の声母

p/*p	ph/*p ^h	b/*b	m/*m	f/*f	v/*v	
背板	怕品	部排	買滿	方風	父飯	
t/*t	th/*t ^h	d/*d	n/*n			l/*l
帶低	太天	道度	腦南			理老
ts/*ts	tsh/*ts ^h	dz/*dz		s/*s	z/*z	
再接	菜初	茶住		三身	自食	
ky/*tɕ	ch/*tɕ ^h	j/*dʒ	ny/*ŋ	hy/*ɕ		y/*j
計今	巧輕	奇件	念認	希香		言有
k/*k	kh/*k ^h	g/*g	ng/*ŋ	h/*h	ʔ/*ɦ	_//*ʔ
改高	考空	共軌	互顏	火好	和夏	安衣
kw/*kw	kwh/*k ^h w	gw/*gw		hw/*hw	ʔw/*ɦw	w/*w
規光	塊困	愧環		化婚	瘟	華完

説明：

(1) Parker は声母を無声音の“High Tones”と有声音の“Low Tones”に分類し、有気音は“High Tones”に充てられている。彼は声母の m, v, l, ng, ny, w に対して“High Tones”と“Low Tones”の両方で挙げているが、それぞれを形の上で区別していない。唯一“High Tones”の v をʔv というように補助記号によって表記を区別しているが、本文の中でʔv は管見の限り現れていない。また、n は“High Tones”でのみ挙げられ、“Low Tones”として挙げられていない。Parker は次濁声母の“High Tones”と“Low Tones”の違いを純粹に音域の高低だけにあると考えていたため、両者をあまり厳密に分けようとしなかったことが推測される。

“The high and low tones are virtually the same sound, differing only in the pitch of the voice.”
(Parker 1923: III)

表 4 Parker (1923) の韻母

a/*a 加夜	ang/*aŋ 常硬	an/*ā 難班	ak/*ak 拆隻	ah/*aʔ 弱踏
e/*e 愛推		en/*ē 善官		eh/*eʔ 活值
i/*i 利米	ing/*iŋ 民林	ien/*ī 天建		ih/*iʔ 別立
au/*ɔ 包高	aung/*ɔŋ 窗光		auk/*ɔk 覺昨	auh/*ɔʔ 作捉
o/*o 花馬	ong/*oŋ 東重		ok/*ok 福續	oh/*oʔ 碌浴
oe/*ø 雖算		oen/*ō 算遠	ock/*øk 決噓	och/*øʔ 月愈
eu/*ɻ 手九	ung/*əŋ 成分		uk/*ək 個	uh/*əʔ 黑側
oo/*u 步夫				
ui/*y 女聚		uin/*ÿ 暈羣		
_/*_1 此是				
u/*ɥ 注書				
ia/*ia 借寫	iang/*iaŋ 亮想		iak/*iak 嚼	iah/*iaʔ 畧嚼
iau/*io 表跳				
	iong/*ioŋ 永			
ieu/*ix 酒憂	iung/*iəŋ 音英			
iui/*iy 喂				

説明：

- (1) 成節的子音として、m/*m (畝嚙)、ng/*ŋ (五午吳魚)、r/*ɻ (而耳兒) が確認される。
- (2) Parker (1923) では、円唇舌尖母音 u/*ɥ と、非円唇舌尖母音 /*_1 の存在が認められる。u/*ɥ は中古音遇撮合口三等に対応し (例：「廚／厨」「櫛」「儲」「樹」「書」「輸」「豎」「緒」「注」、/_*_1 は概ね止撮開口三等に該当するが (例：「翅」「齒」「恥」「此」「雌」「次」「瓷」「磁」「賜」「刺」「史」「使」「屍」「市」「師」「試」「事」「時」「是」「施」「示」「恕」「司」「四」「思」「私」「寺」「絲」「祀」「肆」「志」「誌」「置」「之」「支」「肢」「止」「址」「紙」「知」「智」「致」「緻」「治」「子兒」)、「字」「滋」「自」、蟹撮開口三等 (祭韻) (例：「世」「勢」「制」「製」) や、止撮合口三等 (例：「吹」「水」「嘴」) にも数例観察される。しかし、本来 u/*ɥ として期待される遇撮合口三等字が u/*ɥ と /*_1 の両方で現れたり (例：「除」「處」「如」「暑」「主」「住」「珠」「諸」「舒」「鼠」)、/_*_1 のみで記されたり (例：「朱」「蛛」「豬／猪」)、舌尖母音韻母 u/*ɥ と /*_1 は円唇性における対立を徐々に失い、円唇舌尖母音が非円唇舌尖母音に合流していく様子が見て取れる。

4. 基礎資料から見る 20 世紀前期の上海語の音韻的特徴

Pott (1917) や Parker (1923) のみならず、20 世紀前期に欧米人が著した上海語教科書

には、当時の上海語を反映する様々な情報が含まれている。中には、教科書を手がけた著者自身でさえ音の変化とは意識せずに捉えたものが多いのである。上海市政府に勤める職員達に毎月一度行われる上海語試験で使う練習テキストを作成した D. H. Davis 牧師は、序文で“In publishing a book like this, it is difficult to avoid various typographical errors. The mistakes are chiefly with ‘z’ and ‘dz’ (Many of the Chinese themselves make no distinction in these two sounds). There is an occasional omission of the aspirate ‘h’ and sometimes final ‘h’ is used where ‘k’ should appear. In a few instances the final nasal ‘n’ is misused.” (Davis 1910: II)と述べている。Davis 牧師がここで「誤植」と称している声母 *z* と *dz* の混同や、韻尾における *h* と *k* の交替、鼻化韻 *n* の欠落は、いずれも当時上海語の音韻変化がもたらした現象である。

本稿では、20 世紀以降に作成された Pott (1917) や Parker (1923) に見られる、20 世紀前期上海語の音韻変化と音韻的特徴について、音節を成す声母、韻母、音節末閉鎖音の側面から、軟口蓋破裂音声母の口蓋化 (4.1)、有声歯茎摩擦音 *dz* と有声歯茎摩擦音 *z* の混同 (4.2)、鼻化韻と非鼻化韻の混同 (4.3)、閉鎖音韻尾 *-k > -ʔ* の変化 (4.4)、入声韻母 **eʔ* と **əʔ* の混同 (4.5) の 5 つを取り上げ、考察を行う。

4.1 軟口蓋破裂音声母の口蓋化

19 世紀中期から 19 世紀中後期の文献に関する調査では、軟口蓋破裂音声母 **k*、**kʰ*、**g* に、母音 *[i]* もしくは *[y]* が後続する場合、声母の軟口蓋破裂音が口蓋化し、硬口蓋音または歯茎硬口蓋音で発音されることが分かった (張 2014・2015)。Keith (1855) では、「勸」の声母が *ki'/*cʰ* と *c'/*tʰ* の両方で記されている。また、「窮」の声母は Keith (1855) では *ki/*j* となっているが、Keith (1860) では *j/*dʒ* で記されており、同一人物による表音において不安定な側面を見せている。Edkins (1868) では、“When a native is asked whether *k'i'* or *c'hi'* is the more correct pronunciation of 去 he replies the former. Yet the orthography by *c'hi'* seems to the foreigner more like the true sound. The fact is that the sound is in a state of transition from *k'i'* to *c'hi'*.” (Edkins 1868: 2) と記述しており、有気軟口蓋破裂音声母 *k'i* の発音は聴覚的には *[tʰi]* に近いが、母語話者の規範意識としては *[kʰi]* となっている。保守的な発音と革新的な発音は母語話者の間で共存し、軟口蓋破裂音声母の口蓋化はまだ変化の途上にある様子が窺える。さらに、張 (2015) の調査では、この変化は、音の性質が近いとされる有気音 **kʰ* と有声音 **g* が先行し、無声無気音 **k* はこれらに比べて遅れていることが示唆された。

20 世紀前期における数多くの上海語文献にとって、上海語をラテン文字に転写する際の規範となった Silsby の表音体系では、*ky* の発音について、“*ky=ch* in *church* with all aspiration eliminated. The middle of the tongue should be elevated, while the tip drops down to the lower teeth.” (Silsby 1911: 7) と記されている。つまり *ky* で表記されている音は、調音部位

が[ɣ]と同じ硬口蓋歯茎音と認識して良いが、舌尖ではなく舌端で発音されることが分かる。この記述から、ky の音は無声歯茎硬口蓋音の***tc** と推定される。Silsby の表音体系を参照した Pott は、凡例では“**ky=ch** in *chuk* with all aspiration eliminated.” (Pott 1907: iv)と記しており、また Parker も“**ky** is like ‘**ch**’ in *church* without aspiration.” (Parker 1923: I)と同様に記していることから、両文献における ky の音はいずれも***tc** と推定される。

このように、19 世紀中期の文献でまだ口蓋化する過程にあった軟口蓋破裂音声母は、Pott (1917) と Parker (1923) では、歯茎硬口蓋破裂音に変化を遂げた段階を見せており、20 世紀前期の上海語では軟口蓋破裂音声母の口蓋化が完了したことが明らかとなった。

4.2 有声歯茎摩擦音[ɗ]と有声歯茎摩擦音[z]の混同

Davis (1910) の序文で触れられたように、当時母語話者の間でも[ɗ]と[z]の区別がつかないようになっていた。趙 (1928/2011) でも呉語における声母[ɗ]と[z]の混同を述べている。「必ず‘j’系に‘dj’を入れることはない。その理由は、中古音の牀母と禪母は、現代の‘dj’、‘zh’と同じ皆目手のつけどころがない状況だからだ。両者を区別できる地域として常熟、常州、寧波等が挙げられるが、分類もまたそれぞれ異なる。総じて‘zh’とする。同様に、従母と邪母も一律‘z’とし、‘dz’で表記しない。このような手のつけ所がない状態は、清算するに値がないわけではなく、清算するのに時間を要するのである。それぞれの関係性を整理できれば、方言の古代から現代までの異同について興味深い比較ができるだろう。」(趙 1928/2011: 39-40 筆者訳)

钱 (2014) は 19 世紀中期から 20 世紀中期までの上海語における[ɗ]と[z]の混同を、音韻変化 **ɗ > z** の過程で起きた語彙拡散と解釈している。陈 (2015) は Edkins (1853) と Macgowan (1862) の 2 つの文献で現れた **dz** と **z** の字母を集計し、160 年前の上海語に見られる **ɗ** と **z** の混同は、**ɗ > z** の音韻変化に起因するものではなく、言語接触によって字音の文読層 (**ɗ**) と白読層 (**z**) が競合し、白読層 (**z**) が文読層 (**ɗ**) に取って代わっていく過程を反映したと指摘している。

本稿で取り上げた 20 世紀前期の Pott (1917) と Parker (1923) でも、声母 **dz** と **z** の混同は依然として散見される。声母 **dz** と **z** の混同は主に中古音の従母、邪母、澄母、崇母、船母、禪母に見られる。Karlgren (1954) による中古音再建では、従母の音価を有声歯茎摩擦音***ɗ**、邪母を有声歯茎摩擦音***z**、澄母を有声歯茎硬口蓋破裂音***ɗ**、崇母を有声そり舌摩擦音***ɗ**、船母を有声歯茎硬口蓋破裂音***ɗ**、禪母を有声歯茎硬口蓋摩擦音***z** と推定している。上記の推定音価から、中古音の従母、邪母、澄母、崇母、船母、禪母は閉鎖性の強い順から、澄母 > 従母、崇母、船母 > 邪母、禪母となる。このような性質から、従母、崇母、船母は同じ摩擦音である **dz**、邪母、禪母は同じ摩擦音の **z** として現れやすい。澄母はもともと摩擦性を伴わない破裂音であることから、摩擦音である **z** として実現されにくい。表 5、表 6 では Pott (1917) と Parker (1923) における声母 **dz** と **z** の中

古音対応関係についてまとめた。

表 5 Pott (1917) における声母 dz と z の中古音対応関係

	従母	邪母	澄母	崇母	船母	禪母	その他
dz	層慈從存 <u>錢</u> 罪	隨	茶長場潮塵沉 蟲/虫重綢廚/ 厨櫺除丈着直 住逐賺撞幢	愁棧查	昨	常成城匙授	日母：仍
dz, z	財情	-	-	-	-	-	-
z	材裁匠截淨就 前牆 <u>全</u> 在皂造 賊字自坐座	像謝旋尋	宅擲	<u>柴</u> 豺牀士事燂	船蛇舌神繩實 示順	辰晨善尚裳 <u>上</u> 折市時視是石 受壽樹熟	日母：然人旦 如若

表 6 Parker (1923) における声母 dz と z の中古音対応関係

	従母	邪母	澄母	崇母	船母	禪母	その他
dz	財殘瓷磁存漸	寺緒	茶潮塵廚/厨櫺 除宅陣治住賺 幢	查	-	城誠豎	-
dz, z	才材從 <u>錢</u> 情在 造	俗隨續巡	場朝陳程虫重 綢傳丈趙直值 仲撞	棧	實	常成盛紹樹	日母：仍
z	慚藏層曾薺疾 嫉集籍匠嚼盡 淨靜就聚絕齊 前牆/牆秦晴 <u>全</u> 雜暫皂賊字自 族坐座	祀席習祥翔象 像斜謝邪袖序 徐旋循尋	腸儲站着/著姪	<u>柴</u> 豺愁牀/牀事 鬧狀	乘船射蛇神繩 食示術順昨	辰晨臣承酬垂 純瑞善膳尚裳 <u>上</u> 社折甚慎市 時拾十是石受 授熟塾植涉	知母：啄 徹母：纏/纏 日母：染然擾 惹人仁任旦柔 入如弱若

Pott (1917) では dz と z に混同が見られたのは従母の「財」「情」両字のみである。「財」は基本的に dz で現れるが(例：發財 (dze/*dze)、財 (dze/*dze) 主人)、「恭喜發財 (dze/*dze, ze/*ze)」には dz と z の両方が現れる。「情」は「行情 (dzing/*dziŋ)」「情 (zing/*ziŋ) 願」というように、dz と z が両立している状態である。澄母は「宅」「擲」を除いて、ほとんどが dz で現れており、従母、崇母、船母は逆に大半が z となっていることが見受けられる。邪母は「隨」の 1 例が dz で現れている。禪母は「常」「成」「城」「匙」「授」が dz で現れているが、ほとんどの字音は z でのみ実現されていることが分かった。

Parker (1923) では従母、邪母、澄母、崇母、船母、禪母の全てにおいて dz と z の混同が見られる。従母、澄母、崇母、船母のうち、崇母と船母は dz として現れる「查」(崇母字) と、dz と z の両方で現れる「棧」(崇母字) と「實」(船母字) を除いて、全てが z となっている。従母は大多数の字音が z となっているが、dz のみで現れるものと、dz と z の両方で現れるものがある。澄母は「腸」「儲」「站」「着／著」「姪」の 5 例が z と

して現れ、dz が 12 例、dz と z の両読が 13 例見られた。

両文献における声母 dz と z の中古音対応関係から見ると、崇母字と船母字の dz>z の変化が最も顕著に見られ、その次に従母字が続く。澄母字はより保守的である dz の発音を保持する傾向があったことが明らかとなった。これは Karlgren による中古音推定音価の子音の閉鎖性順と合致する。また、邪母と禅母に関しては、ほとんどの字音が z で実現されており、dz または dz と z の両方で現れる字音は少ない。さらに、dz と z の両方で実現されている字音を比較しても、陳（2015）で提唱されている dz と z はそれぞれ文読層と白読層の字音を表しているとは言い難い。

4.3 鼻化韻と非鼻化韻の混同

Parker (1923) では、鼻化韻と非鼻化韻の混同が中古音の咸摂、山摂、假摂、蟹摂、止摂、流摂に散見される。ここで言う「鼻化韻と非鼻化韻の混同」とは、Parker (1923) 以前の文献で鼻化韻として現れる咸摂字と山摂字が非鼻化韻として表音されたり、鼻化韻ではない蟹摂字、止摂字、假摂字、流摂字が鼻化韻で現れたり、またはこれらの字音が鼻化韻と非鼻化韻の両方で記されたりすることを指す⁵。Parker は鼻化韻を表す際に補助記号ではなく、「主母音+n」の形式で表音しているため、印刷上の誤植とは考えにくく、意図的にそのように表記されたと思われる。Parker (1923) で鼻化韻と非鼻化韻の混同が見られる字の中古音対応関係を表 7 にまとめた。

表 7 Parker (1923) で鼻化韻と非鼻化韻の混同が見られる字の中古音対応関係

	假摂	蟹摂	止摂	咸摂	山摂	その他
非鼻化韻が鼻化韻として現れる	<u>也</u> 且社	台筷耐 <u>罪</u> 待溪	翠眉追	-	-	梗摂：滴
鼻化韻が非鼻化韻として現れる	-	-	-	-	碗	-
鼻化韻と非鼻化韻が混在する	痴	礙/碍杯背菜彩 才材代袋呆隊 改概/慨開累内 碎臺抬/擡退載 在災	悲備規 <u>貴</u> 揮 <u>虧</u> 離	喊染賺	拌串傳穿管冠 換歡蘭憐饅滿 然完專	流摂：兜守周/ 週

Edkins (1868) は上海語の鼻化韻について“The letter n is also affected by the preceding vowel. After a, e, ö, û, it is almost unheard when no word follows, and though a well-defined consonant in the next word brings it into notice, it is still only audible as a slight nasal sound.” (p.56) と述べているように、聴き取りづらい要素である。Edkins (1868) では鼻化韻と非鼻化韻の混同は見られなかったが、同じ時期に刊行された Macgowan (1862) には主に咸摂字と山摂字ですでに現れている。具体的には、半 (pay/*pe, pan/*pā)、滿 (may/*me, man/*mā)、便

(be/*bi, pen/*pĩ)、典 (te/*ti, ten/*tĩ)、點／点 (te/*ti, ten/*tĩ)、煎 (tse/*tsi, tsen/*tsĩ)、尖 (tse/*tsi, tsen/*tsĩ)、棉 (me/*mi, men/*mĩ)、面 (me/*mi, men/*mĩ)、麵 (me/*mi, men/*mĩ)、片 (p'e/*p'hi, p'en/*p'hi)、牽／緯 (che/*tch'i, chen/*tch'i)、錢 (de/*di, den/*dĩ)、賢 (ye/*ji, yen/*jĩ)、現 (ye/*ji, yen/*jĩ)、線 (se/*si, sen/*sĩ)、癬 (se/*si, sen/*sĩ)、顯 (hie/*çi, h'ien/*çi)、焉 (ye/*ji, en/*ĩ)、驗／驗 (nie/*ni, nien/*nĩ)、鹽 (ye/*ji, yen/*jĩ)、嚴 (nie/*ni, nien/*nĩ) の 22 例である。また、蟹摂の「洗 (se/*si, sen/*sĩ)」、止摂の「眉 (me/*mi, men/*mĩ)」にも両者の混在が見られた。20 世紀初頭に初版本が作成された Pott (1917) では「媛 (e/*e)」(山摂)と「背 (pe/*pe, pen/*pẽ)」(蟹摂) の 2 例のみ現れている。

钱 (2014) によると、「1923 年以降に出版された西洋宣教師の著作や 1928 年趙元任の『現代呉語の研究』に記された上海語では既に、咸摂字と山摂字の鼻音が全て欠落している。」(p.83 筆者訳) つまり、Parker (1923) は鼻化韻が非鼻化韻に変化する終盤の様子を表していると考えられる。

表 7 で示されているように、Parker (1923) に見られる鼻化韻と非鼻化韻の混同は、咸摂や山摂の鼻音要素が欠落するほかに、大きな特徴として、蟹摂、止摂、假摂、流摂など非鼻化韻が鼻化韻で表音されるものが数多く存在することである。これは、咸摂や山摂の字音が非鼻化韻で現れたことで、母語話者が鼻化韻字と非鼻化韻字を分別できなくなってしまう可能性が考えられる。それによって、咸摂 (*ã, *ẽ) や山摂 (*ã, *ẽ, *ĩ, *õ) と主母音が近似する蟹摂 (*e)、止摂 (*e, *i)、假摂 (*e)、流摂 (*ɤ) の字音が過剰修正 (hypercorrection) され、結果的に非鼻化韻が鼻化韻として発音された「逆流現象」が生じたと思われる。

4.4 閉鎖音韻尾-k > -ʔの変化

上海語の閉鎖音韻尾-k > -ʔの変化は、19 世紀中期から 20 世紀中期にかけて、上海語の最も重要な音韻変化の一つである。張 (2014) は Keith (1860)、Macgowan (1862) や Edkins (1868) など 19 世紀中期の文献について調査したところ、当時上海語の閉鎖音韻尾は、軟口蓋閉鎖音韻尾*-k と声門閉鎖音韻尾*-ʔの二種類が存在し、特に Keith (1860) では、軟口蓋閉鎖音韻尾*-k は後舌母音*a、*ʌ、*o、*ɔ と共起し、声門閉鎖音韻尾*-ʔは前舌母音*a、*ɛ、*i、*ø、*y と共起する

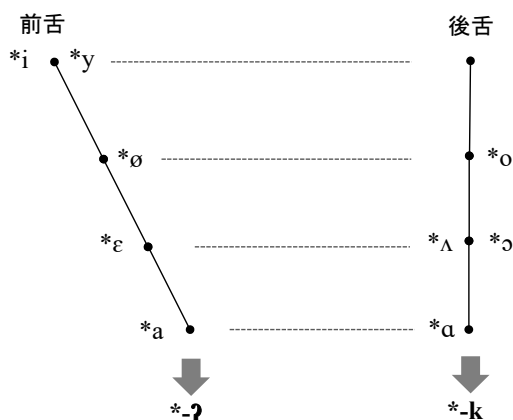


図 1 Keith (1860)における*-k と*-ʔの相補分布

るように、*-k と*-ʔは相補分布を成していたことが明らかとなった (図 1)。さらに、*-

k と*ʔの両方で記された字音を調査したところ、本来軟口蓋閉鎖音韻尾*-k で記される字は、後続する子音が共鳴音である場合、声門閉鎖音韻尾-ʔになることが判明し、閉鎖音韻尾の変化は、後続する子音に影響されることが示唆された。

Pott (1917) では、入声韻母のうち、軟口蓋閉鎖音韻尾*-k を有するのは、*ak (*iak)、*ok の2種のみであり、19世紀中期の文献に比べて種類が少ない。Parker (1923) では、軟口蓋閉鎖音韻尾*-k を有するのは、*ak (*iak)、*ɔk、*ɔk、*ok、*ok の5種が見られるが、そのうち、*ak、*ɔk、*iak で現れる字は必ず*aʔ、*ɔʔ、*iaʔとしても現れている。また、*ɔk は「個」の1例、*ok は「決」(他にも*oʔ、*ok の発音がある)と「噤」の2例にのみ使われ、特定の字に限られる。このように、20世紀前期までなお軟口蓋閉鎖音韻尾*-k が根強く存続しているのは主母音が*o の場合のみであり、軟口蓋閉鎖音韻尾*-k は全般的に声門閉鎖音韻尾-ʔへ合流していたことが示唆される。

主母音が*o である時の入声韻母について、Pott (1917) では軟口蓋閉鎖音韻尾*ok のみ現れ、*ok に該当する字音も他の発音を持たない。それに対し、Parker (1923) では入声韻母*ok で記される字音は、他にも*oʔ、*ɔʔ、*oʔ、*aʔ、*ɔk、*ok などの異読を有する例が見受けられる。表8ではParker (1923) において韻母が*ok で現れる全ての字をまとめた。そのうち、*ok 以外の入声韻母で現れない字は「-」の行に記した。*ok 以外にも他の入声韻母の異読を有する字はそれぞれ該当する行に振り分けた。

表8 Parker (1923) の入声韻母*ok で現れる字の表音と中古音対応関係

異読	山撰	宕撰	江撰	曾撰	梗撰	通撰
-	-	博薄/簿縛閣擱郭 霍/瘡樂摸	駁剝	北國或默	射	觸督讀福服覆腹復谷/穀局鞠哭 六碌陸綠木曲肉熟塾束速俗縮禿 屋續玉育粥祝竹逐囑足族
*oʔ	-	-	-	-	疫	慾/欲獨卜/肱
*ɔʔ	-	托作惡	覺鮫魚殼/壳	-	-	毒燭
*oʔ	決/決血	-	-	-	疫	蓄
*aʔ	-	-	-	-	拍	目
*ɔk	-	-	覺	-	-	-
*ok	決/決	-	-	-	-	-

表8からは、入声韻母*ok が最も多く現れるのは通撰(通撰合口一等、通撰合口三等)であることが分かる。他にも山撰、宕撰、江撰、曾撰、梗撰の入声字韻母が*ok となっている例が見られる。*ok 以外の入声韻母で記された字音は、漢字の変用(例:「獨(dok/*dok)是」「獨(dok/*dok)養兒子」/「獨(=賸)(dauh/*)方歩」、「拍(phah/*pʰaʔ)手」「拍(phah/*pʰaʔ)球」/「拍(phok/*pʰok)托拍托个叩頭」)などに由来するものがある。また、*ok で発音される場合とそうでない時の音的環境を調査したところ、語彙によって発音が分かれていたり(例:「血(hyoch/*ɕoʔ)本」「小血(hyoch/*ɕoʔ)管」/「血(hyok/*ɕok)

氣」、「價目 (mok/*mok) 表」「一目 (mok/*mok) 瞭然」「觸目 (mok/*mok) 驚心」「目 (mok/*mok) 的」／「數目 (mah/*maʔ)」)、同じ語彙で複数の発音が記されるもの (例:「己所不欲 (yok/*jok, yoh/*joʔ) 勿施於人」「瘟疫 (yok/*jok, yoh/*joʔ)」「積蓄 (hyok/*ɕok, hyoh/*ɕoʔ)」「覺 (kauk/*kək, kauh/*kəʔ, kok/*kok) 着」「決 (kyok/*tɕok, kyoch/*tɕoʔ) 斷」) などが多く、言語内的な視点で規則性を見出すことはできなかった。

20 世紀前期の上海語では閉鎖音韻尾 -k > -ʔ の変化が終盤を迎え、当時の文献からは *ok のみが軟口蓋閉鎖音韻尾 *k を根強く保持している以外、軟口蓋閉鎖音韻尾 *k は全般的に声門閉鎖音韻尾 *ʔ へ合流していたことが明らかとなった。*ok の閉鎖音韻尾の変化について、言語内的要因からの考察を試みたが、文献で扱われた限られた語彙例からは規則性を見出すことはできず、その変化は語彙ごとに伝播していくように見受けられた。

4.5 入声韻母 [eʔ] と [əʔ] の混同

Parker (1923) では、一部の字音において、入声韻母 eh/*eʔ と uh/*əʔ が混在していることが見受けられる。本来、中古音で唇内・舌内入声韻尾を有した咸摂、深摂、山摂、臻摂に属する字は主母音が前舌の [e]、喉内入声韻尾を有した曾摂と梗摂に属する字は主母音が中舌の [ə] であるという対応関係が見られる。表 9、表 10 は Pott (1917) と Parker (1923) で入声韻母 eh/*eʔ と uh/*əʔ に表音された字の中古音対応関係である。

表 9 Pott (1917) における韻母 *eʔ と *əʔ の中古音対応関係

	咸摂	深摂	山摂	臻摂	曾摂	梗摂
*eʔ	鵠合磕垃	十	撥活闊/潤末舌 折刷脫	孛勃不出佛忽沒 日瑟實失勿物机	-	釋
*eʔ, *əʔ	-	-	-	-	忒	-
*əʔ	-	-	-	-	得德黑極刻墨色 識則賊直	吃喫赤適

表 10 Parker (1923) における韻母 *eʔ と *əʔ の中古音対応関係

	咸摂	深摂	山摂	臻摂	曾摂	梗摂
*eʔ	疊合垃涉攝葉雜 摺	急入拾十	撥鉢割骨活闊末 說	勃不佛沒日術勿 物姪	食賊值	擊適釋亦
*eʔ, *əʔ	納	執	設折脫	出忽實失質	得德墨塞色式識 飾則直植職	赤宅
*əʔ	磕	及	浙	佛乞	側黑極刻尅忒翼 織	吃喫責

(表 10 のうち、梗摂の「亦」は ih/*iʔ の異読が存在し、「責」「宅」は他にも ah/*aʔ の異読が現れている。)

表 9 からは、Pott (1917) は基本的に上海語の中古音との対応関係に沿って、eh/*eʔ は咸摂、深摂、山摂、臻摂に分布され、uh/*əʔ は曾摂と梗摂に分布されていることが分かる。

表 10 を見ると、Parker (1923) では入声韻母 $ch/*e?$ と $uh/*ə?$ の中古音との対応関係が乱れているように窺える。咸摂、深摂、山摂、臻摂のうち、咸摂では、「納」が $ch/*e?$ と $uh/*ə?$ の両方で表記され、「磕」が $uh/*ə?$ で現れている。深摂は、「執」が $ch/*e?$ と $uh/*ə?$ の両方で記され、「及」が $uh/*ə?$ で現れている。山摂は、「設」「折」「脱」が両音共存で、「浙」が $uh/*ə?$ となっている。臻摂は、「出」「忽」「實」「失」「質」の韻母が両音共存、「佛」「乞」は $uh/*ə?$ となっている。一方曾摂と梗摂に関して、梗摂は「赤」「宅」が $ch/*e?$ と $uh/*ə?$ の両方で記され、「擊」「適」「釋」「亦」が $ch/*e?$ となっており、過半数の字音が $uh/*ə?$ ではない音で現れている。曾摂では、「得」「德」「墨」「塞」「色」「式」「識」「飾」「則」「直」「植」「職」の 12 の字音に $ch/*e?$ という異読が存在し、「食」「賊」「値」の 3 例が $ch/*e?$ のみで現れている。

張 (1990) は、中国の南方地域の梗摂字には文白異読が存在し、白読層の字音は主母音がより広く、文読層の字音は主母音が比較的狭いことを指摘している。Parker (1923) で現れた梗摂入声字を見てみると、主母音が半狭・狭母音で表音されているのは「射擊 ($kyeh/*tce?$) 礮」 $適 (sch/*se?)$ 意」 $解釋 (sch/*se?)$ 」「亦 ($yih/*ji?, yeh/*je?$) 然」など、文読色の強い語が多い。さらに、主母音が半狭母音と半広母音の両方で記されている字音の用例として「赤 ($tshch/*tʰe?, tshuh/*tʰə?$) 身露體」「近朱者赤 ($tshch/*tʰe?$)」「住宅 ($dzeh/*dʰe?, dzuh/*dʰə?$)」「一宅 ($dzuh/*dʰə?, dzah/*dʰa?$)」などがある。「赤」の字音について、明らかに文読層の用例である「近朱者赤」では半狭母音 $ch/*e?$ のみ現れ、「赤身露體」といった俗語は $ch/*e?$ と $uh/*ə?$ の両方で記されている。「宅」も同様、比較的文読色の強い「住宅」では半狭母音 $ch/*e?$ と半広母音 $uh/*ə?$ の両方で表音されているが、助数詞として使われる「一宅 (房子)」では半広・広母音の $uh/*ə?, ah/*a?$ で記されている。このように、梗摂入声韻母における $ch/*e?$ と $uh/*ə?$ の混同は、文読層と白読層の字音が競合することによってもたらされたのだと推測される。

梗摂字の文白異読から見出される規則性は極めて限られた事例に存在する。基本的に、Parker (1923) における $*e?$ と $*ə?$ の混同は、両音の不安定さを映し出すものである。実際に現代上海語では、表 10 に挙げられた各摂の字音のほとんどは、主母音の弱化を受けて、より発音しやすい $[ə]$ となっている。音韻体系でもともと対立を成していた $*e?$ と $*ə?$ は、次第に区別されなくなり、自由変異の段階を経ていたと考えられる。

5. 結語

本稿は、上海語がダイナミックな変化を遂げた 19 世紀中期から 20 世紀中期までの約 100 年間のうち、20 世紀前期という一片を取り上げて議論を展開したものである。19 世紀中期から兆しを見せていた上海語のさまざまな音韻変化は、20 世紀前期の文献では終盤を迎える段階の様相を呈していた。(1) 20 世紀前期の上海語では、軟口蓋破裂音声母 $*k, *k^h, *g$ に母音 $[i]$ もしくは $[y]$ が後続する場合、声母は現代上海語と同じく齒茎硬口蓋

で調音されるようになり、19 世紀中期以前から変化の兆しを見せていた軟口蓋破裂音声母の口蓋化は 20 世紀前期において完了した。(2) 19 世紀中期から見られた有声齒擦音[ɬ]と有声齒茎摩擦音[z]の混同は、中古音との対応関係から規則性が示唆され、先行研究の語彙拡散理論による考察や文白異読に由来するという見解とは異なる結論に至った。(3) 上海語の咸摂と山摂の鼻化韻が非鼻化韻化する変化は、19 世紀中期の文献で既に現れていたが、20 世紀前期の文献では、蟹摂、止摂、假摂、流摂などの非鼻化韻が鼻化韻で表音される「逆流現象」が生じており、当時の母語話者が既に鼻化韻字と非鼻化韻字の区別がつかず、非鼻化韻の字音を過剰修正していた。(4) 20 世紀前期の上海語では閉鎖音韻尾-k>-ʔの変化が終盤を迎え、当時の文献からは*ok のみが軟口蓋閉鎖音韻尾*-k を根強く保持している以外、軟口蓋閉鎖音韻尾*-k は全般的に声門閉鎖音韻尾*-ʔへ合流していたことが明らかとなった。*ok の閉鎖音韻尾の変化について、言語内的要因からの考察を試みたが、文献で扱った限られた語彙例からは規則性を見出すことはできず、その変化は語彙ごとに伝播していくように見受けられた。(5) 入声韻母[eʔ]と[əʔ]の混同は、梗摂字の文白異読等、限られた事例に規則性が見出されたが、両音の対立は固より不安定であったため、次第に区別されなくなり、自由変異の段階を経ている。

20 世紀前期の文献に反映された上海語の音韻変化は、決して一元的な事象から生まれたものではない。表面的に一つの現象として現れているものも、その背景では複雑かつ多元的な言語現象が絡み合っている。また、一つの音韻変化も、序盤・中盤・終盤で異なる様相を見せている。今後は各年代に跨がる、より総合的な考察が期待される。

註

- ¹ <http://www.bdcconline.net/zh-hans/stories/by-person/b/bu-fangji.php> (「華人基督教史人物辭典」)
- ² John Alfred Silsby の上海ラテン文字表記体系は、Silsby が上海市委員会 (The Shanghai Municipal Council) の警察規則をラテン文字に転写する際に初めて使われ、1899 年には上海語協会 (The Shanghai Vernacular Society) にも公認・採用されている。“The description of the romanced system used is reproduced, by kind permission, from the material supplied by Rev. J. A. Silsby to accompany the romanced translation of the Police Regulations published by the Shanghai Municipal Council. This system of Romanization was adopted by the Shanghai Vernacular Society in 1899.” (McIntosh 1906: ii) Silsby の上海ラテン文字表記体系は、20 世紀前期における欧米人が著した上海語の教科書に強い影響を与え、McIntosh (1906) や Pott (1907)、Davis (1910) を初めとする数多くの文献に参照されている。
- ³ 1907 年に初版が刊行された後、Pott の教科書は大学の同僚である W. O'B. Harding 教授による試用が行われた。1909 年の改訂版では、初版本の声調、句読点における誤植やタイプミスなどが訂正され、さらに A. W. Rucker 博士による語彙表も付け加えられた。“In reprinting them care has been taken to make the necessary corrections. The copy used by the late Prof. W. O'B. Harding has

been of great service in the work of revision, as in it almost all the errors in tone marks, punctuation, and typography had been noted. Dr. A. W. Rucker has very kindly compiled the vocabularies at the end of the book, and in this way has enhanced its value.” (Pott 1917: iii) 1913 年には新版が上梓され、同じく聖約翰大学の同僚である F. C. Cooper 教授の提言で 2 つの課が新たに取り入れられた。“In preparing the new edition, the author has received most valuable help from his colleague, Prof. F. C. Cooper. The two new lessons were suggested by him, and the one containing more useful words and phrases is the result of his experience, gained through teaching the book to a class of beginners.” (Pott 1917: iii)

- ⁴ 下線「 」は漢字の文読音（読書音）を意味する。それに対し、「 」は漢字の白読音（口語音）を示す。以下同様。
- ⁵ 咸摂、山摂以外の陽声韻（深摂、臻摂、通摂、江摂、宕摂、梗摂、曾摂）は全て軟口蓋鼻音韻尾[-ŋ]となっているため、本節では特に取り上げていない。

一次資料

Pott, Hawks. 1917. *Lessons in the Shanghai Dialect (Revised Edition)*. Shanghai: The American Presbyterian Mission Press.

Parker, R. A. 1923. *Lessons in the Shanghai Dialect, in Romanized and Character with Key to Pronunciation* 滬語彙編. Shanghai: The Shanghai Municipal Council.

参考文献

- 姜恩枝 (2011) 『西洋传教士資料所見近代上海方言の语音演变』 复旦大学博士学位论文。
- 钱乃荣 (2014) 『西洋传教士資料上海方言著作研究—1847-1950 年の上海話—』 上海大学出版社。
- 钱乃荣 [主编] (2015a) 『开埠初期的上海话』 上海书店出版社。
- 钱乃荣 [主编] (2015b) 『19 世纪晚期的上海话』 上海书店出版社。
- 钱乃荣 [主编] (2015c) 『清代末期的上海话』 上海书店出版社。
- 钱乃荣 [主编] (2015d) 『民国前期的上海话』 上海书店出版社。
- 钱乃荣 [主编] (2015e) 『1930 年代的上海话』 上海书店出版社。
- 趙元任 (1928/2011) 『現代吳語的研究』 商務印書館。
- 张光宇 (1990) 「梗摄三四等字在南方方言的发展」『切韵与方言』 商务印书馆, 103-116。
- 張珣 (2014) 「19 世紀中期における上海語—ローマ字版上海土白聖書と同時代文献との比較から—」『日本中国語学会第 64 回全国大会予稿集』, 303-307。
- 張珣 (2015) 「欧文資料から見る 19 世紀中後期上海語の音韻的特徴」『日本中国語学会第 65 回全国大会予稿集』, 127-131。
- 陈忠敏 (2015) 「论 160 年前上海话声母[dz]/[z]变异—兼论北部吴语从邪澄崇船禪等母读音变异现象」『方言』 (4), 340-345
- Davis, D. H. 1910. *Shanghai Dialect Exercises in Romanized and Character, with Key to Pronunciation and*

- English Index*. 上海：徐家匯土山灣印書館.
- Edkins, Joseph. 1853. *A Grammar of Colloquial Chinese, as Exhibited in the Shanghai Dialect*. Shanghai: Presbyterian Mission Press.
- Edkins, Joseph. 1868. *A Grammar of Colloquial Chinese, as Exhibited in the Shanghai Dialect (second edition, corrected)*. Shanghai: Presbyterian Mission Press.
- Karlgren, Bernhard. 1954. Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, 26: 211-367.
- Keith, Cleveland. 1855. *Zong hæ t'oo bak zæh mung* 上海土白入門. Zong hæ.
- Keith, Cleveland. 1860. *Loo-ka dzæn fōk iung sū*. Zong-Hæ: Van kiö sū ōk.
- Macgowan, John. 1862. *Collection of Phrases in the Shanghai Dialect*. Shanghai: Presbyterian Mission Press.
- McIntosh, Gilbert. 1906. *Useful Phrases in the Shanghai Dialect, with Index- vocabulary and Other Helps*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press and Kelly and Walsh, Limited.
- Pott, Hawks. 1907. *Lessons in the Shanghai Dialect*. Shanghai: The American Presbyterian Mission Press.
- Silsby, John Alfred. 1911. *Introduction to the Study of the Shanghai Vernacular*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- The Hongkong daily Press office. 1910. *The Directory & Chronicle for China, Japan, Corea, Indo-China, Straits Settlements, Malay States, Siam, Netherlands India, Borneo, the Philippines, &c: With which are Incorporated "The China Directory" and "The Hong Kong List for the Far East"*. HongKong: The Hongkong daily Press office.

